

言語獲得期におけるオノマトペに関する研究 —身体性と相互コミュニケーションを中心に—

A Study on Onomatopoeia in Language Acquisition —Focusing on Gesturing Behavior and Communication—

山田丈美¹⁾・林美里¹⁾・梅田裕介¹⁾・八桁健¹⁾・市野悦子¹⁾・水野友有²⁾
・中島賢介³⁾・田邊圭子³⁾・高村真希³⁾・別府悦子¹⁾

Yamada Takemi Hayashi Misato Umeda Yusuke Yageta Ken Ichino Etsuko Mizuno Yu

Nakajima Kensuke Tanabe Keiko Takamura Maki Beppu Etsuko

抄録：本研究では、子どもの言語獲得段階におけるオノマトペの発現の様相とその特徴を事例をもとに分析した。子どもの月齢・年齢、心身の発達段階およびオノマトペの発現を対応させて見ていくと、身振りや動作などの身体的な表出との親和性が高いことが示唆された。さらに、周囲の大人や子どもたちとのオノマトペを介した相互コミュニケーションが言語発達を促進している可能性が示唆された。

キーワード：オノマトペ、言語獲得、動作、身振り、コミュニケーション

I. 問題の所在

本研究は、連携協定を結んでいる、北陸学院大学と中部学院大学との共同研究の一環である。両校は、キリスト教主義を礎にした共通の建学の精神をもち、人材育成を行っている。そこで宗教活動やインクルーシブ保育・幼児教育などの共同研究を実施し、神のもとに人は平等であり、人を人として尊重する理念を礎とした実践や研究を報告してきた。これをさらに具現化するものとして、言語の発達に関する研究を共同で進めている。ドミニク(2020)は、「自然言語を獲得することによって、人間の環世界はほかの生物と比べて飛躍的な変容を遂げた」としているが、人間の発達、中でも言語の発達を追究することは、この共同研究の根幹を担うものであると考えている。2021年度は「発達の観点からみたオノマトペの研究—言語を生み出す過程」をテーマにした。調査の結果、オノマトペが喃語から一般言語獲得の過渡期にある子どもの自己表現やコミュニケーションの中核的語彙の役割を果たしていたことが明らかになった。

ところで、通常1歳台の半ばに訪れる時期は、二足歩行がしっくりし、2, 3語の発語がみられたり、砂を直接さわるのではなくスコップですくうなど、道具の使用を示すというような、子どもが赤ちゃんの時代を卒業して幼児期の力を身につける変わり目の時期(1歳半頃の発達の節目)と言われている(別府、2023)。これが0歳児後半の三項関係(やまだ、1987)をベースとする共同注意や視線追従、社会的参照などの対人関係やコミュニケーションの発達との関連のあることが発達や障害児心理学、霊長類研究などからも蓄積されている。本研究では、こうした1歳半前後の変換点に注目しつつ、オノマトペを発達の視点から検討していく。

コミュニケーションの発達は、運動や移動能力、手の操作における目的をもった活動や「～デハナイ～ダ」という方向転換の力と関わっている(田中・田中、1982)。1歳半の発達の節目では、言葉の数だけでなく、豊かな自他関係に支えられた、「～デハナイ～ダ」という自らの決定を選び取っていく自我の芽生えを伴うのである。また、この時期大人の模倣がさかんになるが、他者の身体の動きに他者の目的や意図を読み取ったうえで、それを自分の

1) 教育学部子ども教育学科 2) 人間福祉学部人間福祉学科 3) 北陸学院大学人間総合学部子ども教育学科

身体に同じように置き換えるということを見せる。こうした他者との関係性は、トマセロ(2006)が9か月革命と称したように、自己を他者のまなざしを通して認知することでもある。林(2021)は、霊長類研究を通して、自分の内面を他者と共有しわかってもらいたいという根本的な欲求が人の発達を促進し、自分のイメージをことばに置きかえて表現できるとする。他者にわかってもらいたいという要求をもとに、注意を共有すること(共同注意)や視線を追従するということは、相手の身体の動きの意味を自分の身体に重ね合わせて理解するということであり、人間独自の発達機序とも言える。オノマトペも定型化された言語としてとらえるのではなく(山田他、2022)、運動や手指の操作性などの機能との連関や他者とのコミュニケーションとの関係で検討していく。

本研究では、言語を習得する乳幼児期にかけて子どもがどのようにオノマトペについて、その意味を理解し、指示対象と結びつけようとするのか。そして、機能連関的視点から、発達時期や身体的発達との関係性、周囲の大人など他者とのやりとりやコミュニケーションとの関係性について検討していきたい。子どもの言語獲得段階におけるオノマトペの発現の様相とその特徴を分析し、子どもの月齢・年齢、心身の発達段階およびオノマトペの発現を対応させ、身振りや動作などの身体的な表出との関連性を検討し、保育・教育の実践に生かし得る知見を得ることが、本研究の目的である。以上より、本研究では、次の2点の研究目的が設定される。

II. 目的

- (1) 乳幼児期の身振りや動作などの身体的な表出とオノマトペの発現との関係性を明らかにする。
- (2) 周囲の大人や子どもとの相互コミュニケーションとオノマトペの発現との関係性を明らかにする。

III. 方法

1. 研究1 親子での発話におけるオノマトペの量的・質的調査

親子の対話場面におけるオノマトペの使用状況について、1)と2)の調査を行った。

1) 子ども家庭支援センターでの調査

- ①日時：2022年8月19日・23日、10月27日、11月2日・15日・22日・24日・29日、12月6日・7日・8日・14日、2023年1月24日の運営時間内(8月は10時～13時、10月以降は10～15時)に実施した。
- ②場所：中部学院大学 各務原キャンパス内 子ども家庭支援センター「ラ・ルーラ」
- ③対象：0歳6か月～6歳4か月の子ども延べ61人とその保護者の発話からオノマトペを抽出した。
- ④記録と処理：当日に施設利用している親子に研究目的を説明し承諾を得たうえで、ビデオ撮影を行った。その後、録画を確認しオノマトペを抽出して、他者との関係性・状況・動作等によりカテゴリー分類した。
- ⑤倫理上の配慮：本調査は、中部学院大学研究倫理審査の承認(C21-0044-2)を受けている。

2) 一般家庭での調査

- ①日時：2023年2月22～3月7日の14日間に実施した。
- ②場所・③対象：1歳6か月の男児の自宅での発話場面におけるオノマトペを採取した。
- ④記録と処理：父親が男児の発話場面におけるオノマトペを書き留め、1)と同様にカテゴリー分類した。
- ⑤倫理上の配慮：本調査は、男児の保護者の承諾と協力のもとに実施した。

2. 研究2 モノや保育者との関わりの中での発話におけるオノマトペの質的調査

1) 託児事業座談会での調査

- ①日時と参加者：2023年2月8日(水) 午前9時20分～11時30分(乳児1名、幼児2名、子育て中の母親と父親6名、大学生8名、教員2名の計19名が参加した。)
- ②場所：北陸学院大学 第2多目的教室
- ③観察場面の設定と対象：0～2歳児が自由に遊べる保育環境の中で生み出される1歳9か月の男児のオノマトペの発現を捉える。
- ④記録と処理：当日、座談会参加親子に研究目的を説明し承諾を得たうえで、ビデオ撮影を行い、記録を作成した。その後、作成した記録よりオノマトペの発現とその様相を考察した。
- ⑤倫理上の配慮：本調査は、対象児の保護者に研究の主旨と目的、調査内容と方法、収集データの取り扱いと管理について十分に説明し、承諾書にて同意を得た。

2) 北陸学院第一幼稚園体育的遊び教室の新聞ボール作りにおけるオノマトペ

- ①日時：2021年6月2日(14:00～15:00)、2022年6月1日(14:00～15:00)
- ②場所：北陸学院第一幼稚園ホール
- ③対象：2021年と2022年に北陸学院第一幼稚園体育的遊び教室で行った、子ども達の新聞ボール作りの活動の

中で、保育者(保育歴31年)が子ども達(2021年:4歳児18名・5歳児13名、2022年:4歳児4名・5歳児15名)に作り方を説明している場面のオノマトペを採取した。

- ④記録と処理:新聞ボール作り全てを観察し、iPadを用いて撮影した。撮影は研究協力者に依頼した。その後、記録を作成し、オノマトペの出現とその過程について考察した。
- ⑤倫理上の配慮:本研究は、北陸学院大学倫理審査の承認(受付番号2022-8)を受けている。

IV. 結果と考察

1. 研究1 親子での発話におけるオノマトペの量的調査

1) 家庭支援センターでの親子間の発話におけるオノマトペ実態調査

(1) 調査結果

表1に、ラ・ルーラで観察されたオノマトペが使用された155例について、カテゴリーごとに分類して集計した結果を示した。大人は計67回オノマトペを使用し、そのうち「大人が子どもの動作に意味づけ」と分類されたものが27回(大人のオノマトペ使用の40.3%)を占めた。大人が使用したオノマトペのうち、『擬音語・擬態語辞典』(山口, 2022)に類似例も含めて記載されていないものは6回(大人の使用の9%)のみ確認された。子どもは計88回オノマトペを使用し、そのうち「子どもが自身の動作を説明」と分類されたものが81回(子どもの使用の92%)と大部分を占めていた。子どもが使用したオノマトペのうち、類似例も含めて辞典に記載されていないものは21回(子どもの使用の23.9%)を占めた。子どもが自身の動作を説明するという最も多く観察されたカテゴリーの中で、年齢ごとに分けると、1歳台では9回のオノマトペ使用のうち、6回(66.7%)が辞典に記載されていないものだった。2歳台では、39回オノマトペを使用し、9回(23.1%)が辞典に記載されていなかった。4歳以上になると、24回のオノマトペ使用のうち、2回(8.3%)のみが辞典に記載されていないものだった。

(2) 考察

大人も子どもも、子どもがおこなう動作に対する意味づけをするという文脈で、オノマトペを使用する頻度が高かった。特に、子どもは自分自身の動作を説明するために、オノマトペを使うことが多かった。また、大人が使ったオノマトペは9割が辞典に掲載されているものだったが、1歳台の子どもでは半数以上の3分の2程度が辞典に記載されていないものだった。辞典に記載されていないオノマトペは、2~3歳では2割程度、4歳以上になると大人と同程度の1割未満にまでその割合が減少した。言語発達の初期段階で急速にオノマトペの定型化が進んでいることから、大人や他児との関わりの中でより汎用性が高い表現に置き換わっていく可能性が示唆された。

表1 カテゴリーごとの生起頻度と「子どもが自身の動作を説明」するカテゴリー内での年齢別データ

カテゴリー	保育的意図・Pの意識	実数	(%)	辞典該当なし	(%)
大人が大人の動作を説明・意味づけ	遊びの雰囲気づくり・遊びへの誘い	7	(10.4)	1	
大人が動作とともにデモンストレーション・指示	遊びの雰囲気づくり・遊びへの誘い	7	(10.4)	0	
大人が子どもの動作に意味づけ	無意識を意識化/リズム・響きを楽しむ	27	(40.3)	2	
大人が子どもの動作を受けて指示	遊び・動作を拡げる	11	(16.4)	1	
大人が子どもに動作をするよう指示	遊び・動作のきっかけ作り/用途説明	11	(16.4)	1	
大人が状態や事物に意味づけ	遊びへの雰囲気作り・遊びへの誘い	4	(6.0)	1	
大人小計		67		6	(9.0)
子どもが自身の動作を説明	自己内対話/状況を周囲に共有(コミュニケーションの手段)	81	(92.0)	19	
子どもが他者の動作に意味づけ	一緒に遊びたい??	1	(1.1)	0	
子どもが状態や事物に意味づけ	状況理解・遊びの世界に入り込む	6	(6.8)	2	
子ども小計		88		21	(23.9)
合計		155		33	

カテゴリー	年齢	実数	辞典該当なし	(%)
子どもが自身の動作を説明	1歳台	9	6	(66.7)
	2歳台	39	9	(23.1)
	3歳台	9	2	(22.2)
	4歳以上	24	2	(8.3)

i) 具体的なオノマトペの使用とその使用場面に焦点を当てて

抽出した155種のオノマトペから、実際に使用されたオノマトペと使用場面を具体的に取り上げて考察する。

i-1) 「電車遊び」A児(3歳8ヵ月) B児(2歳6ヵ月) と「おまご遊び」C児(6歳4ヵ月)・D児(4歳4ヵ月)

A・B児は電車の玩具を走らせている。線路を見立てて遊ぶA児は、鉄橋では「カンカンカンカンカン」、通常線路では「ブーン」と異なるオノマトペを使用する。その後、保護者が電車を逆向きに動かす様子を「ピーピーピーピー」と発しながら示し、A児に「バックしてください」と伝える。するとA児も「ピーピーピーピー」と言って電車をバックさせた。B児は電車の動きに合わせて「ピューン」「ガタンゴトン」「ジャー」「ブブー」とオノマトペを多用している。保護者がB児の動きに合わせて「シュッシュッポッポ」と発すると、B児は「ポッポー」と言い引き続き電車遊びを続ける。一部線路が外れたため保護者が「ガタン」と言いながら線路を直すと、別場面でB児は電車同士を連結させながら「ガタン」と発した。C・D児は卵の玩具でままごとをしている。C児は卵の玩具を「パカー」と発し割るふりをしている。割れていない卵を隠し、割れた卵を皿に「シュー」という言葉とともに乗せ、実際に卵が割れたような工夫をしている。その場面を見ていたD児はC児の真似をし、「バラーン」という言葉を発しながら割れた卵を皿に乗せる。続いてD児は「ガブツ」と発しながら卵を食べるふりをする。

i-2) 考察

A・B児ともに電車が走る環境・動きに応じ、使用するオノマトペ種の多様性が見受けられる。環境によって生じる音「カンカン・ブーン・ガタンゴトン」と電車自体あるいはその速度を示す音「ピューン・ブブー」などを組み合わせながら使い分け、遊びの世界をより膨らませていた。子どもたちは生活経験をもとに、場面・環境や動きとオノマトペを結びつけることで、豊かな言語表出に繋がっていると考えられる。また子どもは周囲の他者とのやりとりから、動作に対応した新たなオノマトペを即座に吸収する傾向にある。一方で、「ガタン」を何かと何かをくっつける・はめ込む音であると感じとったB児のように、習得したオノマトペを子どもなりに解釈し、異なる場面に応用し使用することも示された。また、C児は卵を皿に乗せる際「シュー」というオノマトペを使用し、本場面をD児は真似している訳だが、同じ場面でもD児は「バラーン」と違うオノマトペを発した。ここから、同じ動作を真似しても、それぞれの場面や動作から子どもが受け取る感覚や印象は異なることが推察される。だからこそD児が発したオノマトペはC児のものとは異なり、D児が感じたままの自由に富んだ表現になっていたのではないか。さて、表1において大人は辞書的な使い方でおノマトペを用い、子どもは辞書にはない使い方でのオノマトペ使用が多いことを示している。本場面で記録したこれらのオノマトペも、辞書には載っていないもの、あるいは載っていても大人の想定を超える使い方や用いられている点が多い特徴がある。子どもは、生活経験や周囲の他者から習得したオノマトペの使用やその応用という限定的な使い方だけでなく、その場面場面で感じたことを感覚的かつありのままの自由な言葉で表現している。大人の真似をしたり教えられたりして習得する言語と異なり、遊びに没頭し環境やモノとの対話を重ねながら、自由なオノマトペとしてその瞬間瞬間に紡ぎ出していく点も、この時期の子どもの言語特性の一つと言えるのではないか。

本項では、抽出した事例から年齢問わず特徴的な2場面を取り上げ考察した。次項では1歳台の幼児に着目して考察を行い、オノマトペの発現過程やその特徴についての示唆を得ていく。

2) 1歳前後の男児のオノマトペ発現状況

(1) 調査結果

1歳6か月のE児の発話場面におけるオノマトペを観察していくと、E児が発するオノマトペの中で「バ！」または「バ〜」という発話が繰り返見られることがわかった。そこで、14日間E児の「バ！」または「バ〜」という発話に着目して記録を取り、1)と同様にカテゴリー分類した。

表2に、E児の「バ！」または「バ〜」というオノマトペが使用された53例について、カテゴリーごとに分類して集計した結果を示した。E児は14日で計53回「バ！」または「バ〜」というオノマトペを使用し、そのうち「子どもが自身の動作を説明」と分類されたものが25回(全体の47.2%)、次いで「子どもが他者へ意思を伝達」と分類されたものが23回(全体の43.4%)を占めた。また、E児が発する「バ！」または「バ〜」というオノマトペについて、発した時の状況を踏まえ、E児の父親がその意味合いを推測して表2中にまとめた。

(2) 考察

本節では、E児が発するオノマトペの中で「バ！」または「バ〜」と発したものだけを取り上げて分析を行ったが、同じ「バ！」または「バ〜」というオノマトペでも、状況によって多様な意味が含まれていることが推測できる。1歳6か月という、まだ1語文しか話せないが、自己主張が強くなってくる時期においては、E児にとって簡単に発話可能な「バ！」または「バ〜」というオノマトペを状況に応じて使い分けることで、自分の主張を親に伝えているものと考えられる。カテゴリー別に見ても、「子どもが他者の動作に意味づけ」よりも「子どもが自身の動作を説明」と「子どもが他者へ意思を伝達」に分類されるものが多かったことは、生活の中で親に即座に伝えたい欲求や主張、感情を、「バ！」または「バ〜」というオノマトペで代替している可能性が示唆される。このこと

は、子どもの発達において、他者(親)への意思伝達欲求の拡大と、限られた習得語彙数との葛藤の中で、オノマトペがその橋渡しとなっていることを示す貴重な場面ではないだろうか。

表2 「バ！」または「バ～」の発話に関するカテゴリごとの生起頻度

カテゴリ	発話時の状況	状況を踏まえて 親が推測する意味合い	実数	実数(カテ ゴリー計)	(%)
子どもが自身の動作を説明	チャイルドシートに座って「バ！」	ちゃんと座れたよ！	3		
	壁から顔を出し隠れして「バ！」	見て！	4		
	着替え時に服から顔を出して「バ～」	(顔が) 出たよ～	2		
	何の前触れも無く「バ～」	楽しいな～	4		
	自らドアを開けて入って来て「バ～」	こんにちは～	3		
	自ら毛布を持ち上げ顔を出して「バ～」	(顔が) 出たよ～	3		
	遊びの途中で何気なく「バ！」	おやっ！	1		
	駆け寄って来て「バ～」	見て見て～	5	25	(47.2)
子どもが他者の動作に興味づけ	テレビをつけた直後に「バ！」	(テレビが) ついた！	1		
	ドアから親が入ってきて目が合って「バ！」	ここだよ！	2		
	カーテンが閉まって「バ！」	暗くなった！	1		
	食べ物をもって「バ！」	わーい！	1	5	(9.4)
子どもが他者へ意思を伝達	何気なく目が合って「バ！」	やあ！	8		
	親が観ていたテレビ番組終了後に「バ～」 「バ！」	自分が観たい番組に早く変えて～	3		
	テレビを見ながら「バ～」 「バ！」	やった～、イェーイ！	11		
	夫婦の会話中に割り込んで「バ～」	僕も話に加えて～	1	23	(43.4)
合計			53		

2. 研究2 親子及び保育者との発話におけるオノマトペの事例と質的分析

1) 1歳9か月、親子のやりとりでのオノマトペ事例

(1) 調査結果

T男は、絵本棚の絵本を手にとると、「てっ」と声を出し、絵本を棚の一か所(上段右端)に集め始めた。それを繰り返して、上段の絵本を全て集め終わると「てえ～し」と少し長めの声をあげる。次に、絵本棚を見渡し、下段の絵本を手にとると「ててっ」と声をあげ、上段右端に入れようとする。しかし、絵本はぎゅうぎゅう詰めであるため、先ほどまでのようにスムーズには入らない。そこでT男は、「てっ」と声をあげ、左手で絵本をおさえ、右手で絵本を押し込む。入れ終わると「てっ！」と先ほどより大きな声をあげる。そして、最後の一冊になると「え」と声をあげてしゃがみ、絵本を手に取り立ち上がる際には「う～～よし！」と発する。

(2) 考察

今回、1歳9か月のT男のオノマトペの発現を見つめることにより、次の4点が確認できた。

1点目は、T男がクリエイティブにオノマトペを使用していた点である。絵本をつかむ、押さえるなどの場面で「てっ」「ててっ」と発声し、大人が使用する習慣的オノマトペとは異なるオノマトペを使用し、ものをつかむ音や押す音を表現していることが確認できた。これは、習慣的なオノマトペである「ぎゅっ」や「ぐいぐい・ぐぐ」などを覚えていない1歳9か月だからこそその表現であり、まさにT男が生み出したT男独自のオノマトペであるといえるだろう。

2点目は、日ごろの親とのやりとりからオノマトペを獲得し、使用していた点である。絵本を集め終えたT男が発した「てえ～し」という言葉や、最後の絵本を手に取り立ち上がった際に発した「う～～よし！」は、大人が何かを終えた時に使用する「よ～し」に似ている。人間には、発せられた言葉の音の強弱や抑揚によって意味を判断する能力が備わっていると言われるように、本事例においてもT男が大人の満足感、達成感を感じた時に発する言葉を耳で聴き、意味を判断し、使用していたことが確認できた。これが習慣化することにより「てえ～し」が「よ～し」に変化していくと考えられる。また、山梨(2020)が「乳幼児は、愛着や共感をもつ相手やモノが強化因子になりやすく、自分の感覚、快感や不快感を基軸として、言葉の獲得をする。」と述べるように、T男が絵本を一か所に集めるという行為を達成できたことにより発現されたオノマトペであったといえる。

3点目は、動作の大きさの違いにより、オノマトペが変化した点である。今回T男は、上段の絵本を手にとる際には「てっ」と発し、下段の絵本を取る際には「ててっ」と発していた。身体の動きの違いとして、下段の絵本を取る時には「しゃがむ」という動作が行われたことである。絵本を手にとるという同じ行為であっても、身体の動かし方の違い(力の入れ方の違い)により、オノマトペが変化した場面であった。同じ音が繰り返される場合は、動作や状態の反復を表わし、より言葉を強調させると言われることから、「ててっ」はT男にとって「てっ」より力や思いがこもった表現であったと捉えることができた。

4点目は、T男がモノと対話しながらオノマトペを表出していた点である。T男は、絵本を棚に入れていく際に、冊数が増えると力を入れて押し込まなければいけないこと、下段はしゃがまなければいけないこと等を絵本コーナーのモノと対話しながら気づき学びとっていった。つまり、意欲的に自らモノと関わることで思考しながらオノマトペを表出させていったのである。秋田(2022)が、オノマトペの使用には順序があり、保育者や親は無意識に子どもの発達にあったオノマトペを使用する。また、それが専門性だと述べるように、オノマトペの発現の過程においても大人が子どもの発達に合ったオノマトペで語りかけることは大変重要であると言える。しかし、本場面でのT男は、周りの大人に視線を向けておらず、共感を求めている。また、周りの大人もT男の世界を理解し見守り、習慣的なオノマトペを返してはいない。つまり、T男のオノマトペが「大人が子どもの世界を知るための接点」となったことより生まれたオノマトペであったといえるだろう。

以上のことから、T男独自のオノマトペが発現したのは、没頭できる遊び、邪魔されず一人で遊べる空間、モノと対話できる時間、そっと見守る大人の存在があったことにより、T男がモノと関わりながら試行錯誤する過程を十分に味わったからであると考えられる。大人の役割は、子どもの文脈を捉え、子どものオノマトペと一緒に楽しむこと、自身の言葉が、子ども独自のオノマトペ(子どもの言葉)を奪っていないかと問うことであろう。

2) 北陸学院第一幼稚園体育的遊び教室における新聞ボールの芯作りの事例

(1) 調査結果

新聞ボールは新聞紙全形3枚で作成する。最初に新聞紙1枚を小さく丸めて、硬い球状の芯を作る。2021年と2022年に実施した新聞ボール作りにおける芯作りの場面(以下各々 2021年、2022年と記載)は以下の通りであった。なお、両年とも説明は同じ保育者が行っている。

2021年において保育者は、子ども達の前で作り方を説明しながら実際に作って見せた。新聞ボール作りの中でも芯作りは、4~5歳児の子ども達にとって力のいる難しい作業である。保育者は以下のように説明し、子ども達の様子を見ながら働きかけると子ども達はすぐに作り始め、作ることに集中した。

保育者：「この1枚をギュギュギュギュギュ(1枚目の新聞紙を両掌の中に集め、小さく丸める)。すっごくちっちゃくしてよ。ギュギュギュギュギュ、すっごく小さくしてよ。ギュギュギュギュギュ。ほら、こんなに小さくなった(おにぎりを握るように新聞紙を両手で握る)。(握る動作を続け、子ども達を見渡しながら)頑張ってる、頑張ってる。ギュギュギュギュギュって、ちっちゃくするんだよ。ちっちゃく、ちっちゃく、ちっちゃく。ギュギュギュギュギュ。ギュ。そうそう。〇〇ちゃん、もっとちっちゃく、ちっちゃく、ちっちゃく。もっとちっちゃく、ちっちゃく。」

2022年において保育者は、前年に経験している子どもが多いため、子ども達に作らせる前に手順を確認した。子ども達に作り方を尋ね、子ども達から出た意見に従って作り、イメージ通りに出来ているか子ども達に確認した。保育者の問いかけに子ども達は口々に答えていた。以下は、子ども達から出た様々な意見の中から保育者が5歳児のA男(4歳5ヶ月)とB男(4歳4ヶ月)の意見を取り上げ、応答した場面である。

保育者：「1枚目はどうするんだったっけ?(どうするのだったかな?の意味)」

A男：「くしゃくしゃ。丸める!(両手を合わせ指を細かく動かしながら手首を回す)」

保育者：「くしゃくしゃ。これくらい?」(1枚目の新聞紙を軽くつぶす)

B男：「丸める。」「もっと丸める。」①

保育者：「もっと、もっと。はい。じゃあもっと②。これくらい?」(新聞紙をつぶしながら丸める)

B男：「まだー。」③

保育者：「まだまだ。まだまだ。はい、じゃあ、まだまだギュ④。」(新聞紙を固く丸めて球状の芯を作る)

(2) 考察

2021年において、保育者は子ども達の前で「ギュギュギュギュギュ」というオノマトペと共に、1枚目の新聞紙を素早く両掌で集め、小さく丸めて見せた。すると子ども達はすぐに保育者の動作を真似て新聞紙を小さく丸め始めた。遠矢(1992)は、運動感覚に対応する擬態語的音韻情報が、実際の動きに伴う幼児の「体の感じ」に結びつき、運動の記憶を促進することを報告している。保育者が自身の運動感覚を子ども達に伝えようとして発したオノマトペは、言葉だけでは伝わらない保育者の動きを、子ども達の「体の感じ」に結びつけると共に、運動の記憶として子ども達の中に取込まれることで、保育者の動きを模倣し易くした可能性が考えられる。

その後保育者は、子ども達の様子を見ながら動作を交え、「ギュ」や「ギュー」というオノマトペを繰り返し、新聞紙を更に小さく丸めるよう促している。また、2022年でA男がイメージしている状態を小さく丸める動作と共に、「くしゃくしゃ」というオノマトペで保育者に伝えると、保育者はすぐに動きを伴いながら、「くしゃくしゃ」というオノマトペで応じている。しかし、B男からオノマトペ以外の言葉(下線部①③)が示された際、保育者は発言の一部の「もっと」や「まだ」を下線部②④のように繰り返し、抑揚をつけながらリズムカルに動作と同期させ、

オノマトペのように使う様子が示された。工藤ら(2011)は、説明的言語では伝えづらい動きや状態を伝える際にオノマトペが、視覚的なイメージと筋運動感覚との統合を容易にすることを報告している。本事例で保育者が、動作を伴いながら定型のオノマトペだけでなく、言葉の一部をオノマトペのように用いたのは、保育者が言葉だけでは伝えにくい動きや状態を子ども達に伝えるために働きかけ、やり取りを通して共有しようとしたことで無意識に現れた可能性が考えられる。今後、人的環境としての保育者が行う子ども達への働きかけや、やり取りの際に、動作を伴って出現するオノマトペ及びオノマトペのようなリズムカルな言葉に着目することで、子ども達が言葉だけでは現せない動きや状態を他者と共有し、理解する過程の一端が明らかになるのではないかと考える。

V. まとめ

1. 身振り・動作とオノマトペ

本稿の研究1では、家庭支援センター内での親子のやり取りの中で使用されたオノマトペ155例のうち、「大人が子どもの動作に意味づけ」と分類されたものや「子どもが自身の動作を説明」と分類されたものが大部分を占めていた。また、1歳半のE児の「バ！」または「バ～」というオノマトペ計53回中でも「子どもが自身の動作を説明」との分類が25回と多かった。これらの結果から、オノマトペが身振り・動作と親和性が高いことが示唆されたといえる。また、研究2の1歳9か月のT男の事例では、絵本を手取る動作とその際に発せられたオノマトペとの関係から、動作の大きさの違いによりオノマトペが変化の様子が認められた。さらに、新聞ボール作りの事例からは、動作や運動感覚の理解や伝達に関して、オノマトペが促進的な働きをすることが示唆された。本研究で得られた身振り・動作とオノマトペとの密接な結びつきと相乗的な効果は、子ども自身の自由で積極的な活動を支えるものであり、保育・教育の実践に取り入れていきたい。

2. コミュニケーションとオノマトペ

研究1・2から、オノマトペは子どもと他者(大人)との世界を共有するための「接点」となり、その接点の役割が発達に伴って変容していることが示唆された。いわゆる赤ちゃん期までの子どもと他者とのコミュニケーションでは、自身の世界に大人を巻き込むための接点として機能しており、その後、1歳半の節目を越えて赤ちゃん期から幼児期へと変換する時期には、逆に大人が子どもの世界を共有するための接点となっていた。

0歳後半には、子どものオノマトペが動作説明、他者認識、意思表出といった多様な意味をもちながら、自身の世界に他者を巻き込むきっかけとなっていた。つまり、子どもが物や他者と1対1の関係(二項関係)の中で獲得・表出してきたオノマトペが、他者とのコミュニケーションを生み出す役割を担っていると考えられる。一方、1歳半の節目を越え自己認識が深まり、自我が芽生える幼児期前半では、子どもが大人(養育者)との世界と自身の世界を明確に切り分けはじめる時期であり、この時期のオノマトペは大人側から子どもに近接する役割となっていた。このように初期発達におけるオノマトペは、子どもと他者とのコミュニケーションにおける「接点」として機能し、子どもと大人の関係性のバランスを保ち、その後の長く続く複雑で多様な対人関係の発達を支えると言える。また、抽象的・論理的思考が発達する児童期以降では、具現化が難しい世界を他者と共有できる「接点」として発展的で創造的に活用されるだろう。幼児期までの発達を基盤としながら、オノマトペが人間のコミュニケーションにおける他者との接点としてどのような変容をとげるかはたいへん興味深い。

3. 言語獲得におけるオノマトペの役割

近藤(2021)の「自身の感情にぴったりくるオノマトペを用いて表現し、伝え合い、共有するというのは、うまくことばを使いこなせない言語獲得期の子どもにおいてことばの魅力や表現することの楽しみを高める点でも大切である」という言葉に代表されるように、子どもの言語獲得において、オノマトペがその助けとなるという主張は研究者の間では自明なことであるように思える。ただ、秋田(2022)は「オノマトペの音象徴は子どもの言語獲得を助ける」としながらも、「乳幼児期にオノマトペというアイコン的な言葉をうまく獲得できたとしても、そこから抽象的な大人の言語を発達させるまでには、大きなギャップがある」とし、その段階が決して容易ではないことを主張している。また、「親のほうも、育児語を少しずつ大人の言葉に置き換えることで、大人の言葉へとガイドする」ものとして、子どもとのコミュニケーションにも発達に応じた配慮が必要であると述べている。

しかし、その一方で、子どもの言語獲得に大人が必要以上に関わることに忠告する主張もある。今井(2013)は、「大人がすべきことは協力であって、教え込みではない」と改めて述べたうえで、言語は子ども自身が自分で考え、自分で修得するしかない、大人はそのために「上質の言語のインプット」を与えるしかないとしている。保育者には、子どもとの相互コミュニケーションの中から、オノマトペを引き出しながらも受け止めて、言葉の表出を促し、さらに子どもから発された豊かな言語表現の意味を解釈し理解する力量が求められると言えるだろう。

【参考・引用文献】

- 秋田喜美, オノマトペの認知科学, 新曜社, 2022
- 今井むつみ, ことばの発達の謎を解く, ちくまプリマー新書, 2013
- 今井むつみ・秋田 喜美, 対談 ことばをめぐる不思議・謎・面白さに遭遇する, 発達, 43(172), 2-12, ミネルヴァ書房, 2022
- 工藤芳幸・平井沢子・崎原秀樹, 擬音語・擬態語の言語化が系列動作記憶に与える影響: 3-4歳児を対象とした模倣遊び場面における実験的検討, コミュニケーション障害学, 28, 43-49, 2011
- 近藤綾, 子どもと大人のオノマトペ, 早稲田文学, 2021年春号, 2021
- 田中昌人・田中杉恵, 子どもの発達と診断2: 幼児期後半, 大月書店, 1982
- 遠矢浩一, 幼児の運動記憶における擬態語的音韻の言語化効果, 教育心理学研究, 40(2), 148-155, 1992
- トマセロ M(著), 大堀壽夫・中澤恒子・西村義樹・本多啓(訳), 心とことばの起源を探る: 文化と認知, 勁草書房, 2006
- ドミニクチェン, 未来をつくる言葉—わかりあえなさをつなぐために—, 新潮社, 2020
- 林美里, ヒトとチンパンジーの子どもの発達, モンキー, 5(4), 96-97, 2021
- 別府悦子, 発達相談・乳幼児健診における社会性の発達に困難を抱える子どもたちの早期発見と支援, 別府悦子・宮本正一(編著), 神尾陽子(監修), 子どもの社会的行動のアセスメント, 風間書房, 2023
- 宮津寿美香, 発達に伴う「指さし行動」の質的变化, 保育学研究, 56(2), 30-38, 2018
- 山口仲美(編), 擬音語・擬態語辞典, 講談社学術文庫, 2022
- 山田丈美・林美里・八桁健・梅田裕介・水野友有・ダーリンプル規子・中島賢介・田邊圭子・高村真希, 発達の観点からみたオノマトペの研究—言葉を生み出す過程—, 中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要, 23, 77-89, 2022
- やまだようこ, ことばの前のことば (ことばが生まれるすじみち 1), 新曜社, 1987
- 遠矢浩一, 幼児の運動記憶における擬態語的音韻の言語化効果, 教育心理学研究, 40(2), 148-155, 1992
- 山梨みほ, 乳幼児の言葉の発達と保育者・養育者における「言葉」を育む援助, 浦和大学・浦和大学短期大学部 浦和論叢, 62, 98, 2020

【謝辞】

本研究は、2021～2022年度中部学院大学教育改革研究事業の研究費助成を受け、中部学院大学と北陸学院大学との間で行った共同研究である。本調査にご協力いただいた中部学院大学子ども家庭支援センター「ラ・ルーラ」、北陸学院第一幼稚園、北陸学院大学託児事業座談会、調査依頼先のご家庭に心より感謝申し上げたい。なお、本稿をまとめるにあたっては、西垣吉之・下内充の両氏に助言・指導を頂いた。